

## まえがき

もしもダラム卿 〔一七九二—一八四〇〕、イギリスの政治家・軍人。一八三八年、總督として現地に 〔赴任し、フランス系住民の同化の必要性を説く「ダラム報告書」を本国に提出〕 がジャック・ラクルシエールに会つていれば、彼はフランス系カナダ人が「歴史も文学も持たない民族」などと書くことはけつしてなかつただろう。実際、ケベック州において、ジャック・ラクルシエールの名前は歴史と同義である。一九六二年の『ボレアル・エクスプレス』紙創刊号から二十一世紀初頭に出版した本書『ケベックの歴史』に至るまで、ジャック・ラクルシエールは、一五三四年にジャック・カルティエ 〔一四九一—一五五七、フランスの探検家。ヨーロッパを遡ること成功〕 によつて始められたわれわれの共同の冒険について研究し、それを普及させることを一生の仕事としたのである。

ジャック・ラクルシエールの著作目録は膨大で、敬意にあたいする。一九六八年から一九八三年まで、若いケベック人たちは、ドニ・ヴォージョワ 〔一九三五—、出版社ボレアル・エクスプレス共同創設者。政治家。ルネ・レヴェック政権で文化大臣なども務めた〕

とジャン・プロヴァンシエ〔一九四三〕、歴史家、テレ・ビ・ラジオの司会・進行者との共著である教科書『カナダ』ケベック、歴史の総括』を読むことで自分たちのネイション〔ケベック州では、州やその住民を一つの「民族」として捉えたとらえた表現が使われることが多い。これに「民族」や「国家」という訳語をあてるのは無理があるため、この〕の歴史を発見した。〈十月危機〉〔ケベック州の独立を主張するケベック解放戦線が一九七〇年十月に起こした二件の事件。モンレアル駐在のイギリス人商務官ジェイムズ・クロスマンが拉致され、後者が殺害された。〕から二年も経たないうちにジャック・ラクルシエールは『警報だ、市民よ』クロス・ラポルト事件』を発表する。この本はもう何年も前から入手できなくなっているが、彼はそのなかで、一九六〇年代初頭以来のケベック解放戦線の一連の動きを跡づけてから十月の出来事について詳細に述べ、説明していた。彼がいかに多様な関心をもっていたかは、一九七一年と七二年に、ケベック州、アメリカの独立革命、および一八三七年から三八年の動乱〔ルイ・ジョゼフ・パペノーら愛国党員による、イギリス統治に対する一連の反乱〕について、矢継ぎ早に出版したことが証明してくれる。一九七九年から八二年には、エレヌ・アンドレ・ビジエ〔一九四七〕、歴史家とともに『われらのルート——ケベック人の生きた歴史』シリーズを執筆している。これは政治史だけでなく、とりわけ人びとの日常生活がきわめて楽しく紹介された、まさしく情報の宝庫だ。実際、ジャック・ラクルシエールの手腕の一つは、大きな歴史と日常生活を結びつける生来の才にある。古文書、新聞、司教たちの教書、ケベック史の立役者たちの書簡に関する彼の知識が味わい深いエピソードで話を彩り、ある時代の雰囲気や生活様式をわれわれに感じ取らせてくれるのである。

『アメリカ大陸の叙事詩』や『一面トップで見る歴史』のようなテレビ番組に出演するジャック

ク・ラクルシエールはまた、『私たち流のフランス革命』や、『大恐慌と呼ばれたもの』、『第二次世界大戦と世論』など、カナダ放送協会の文化チャンネルで放送されるラジオのシリーズにも貢献した。これら三つのシリーズで、ジャックはプレゼンターとしての大いなる才能を発揮し、ケベック史に関する博識を証明した。

円熟期の作品である本書『ケベックの歴史』において、ジャック・ラクルシエールはケベック史の総括と省察を行っている。まさしく離れ業であり、重要な政治的出来事、日常生活、論争、ケベックの運命をつくり上げてきた保守派と進歩派の対立などを自分の文章に組み込みながらケベック社会の進展を跡づけることに成功している。

私はジャック・ラクルシエールに対して友情と敬意を抱いているが、それ以上に、何よりもまづケベック史に関する四〇年以上にわたる研究と思索の成果である本書の質の高さを認めずにはいられない。ジャック・ラクルシエールの大きな功績は、生涯にわたって、一般の人びとのケベック史に対する関心を刺激しつづけたことにある。

アンドレ・シャンパーニュ